

ポストコロナの 可能性としての 〈女子たち〉

足下のユートピア

檜木祐人「ハクメイとミコチ」(終回)

池上貴子

一 「みんなと同じ」の落とし穴

「ポストコロナの可能性としての〈女子たち〉」というテーマで始めた最初に、「生産性の呪いはどのように対処すべきなのか。あるいはどうやったら躲^{かわ}せるのか」という問いを立てておいた。その解答への道筋は、〈女子たち〉をモチーフとした作品群を分析してきたことで、ある程度みえてきたように思う。各作品に描かれる〈女子たち〉は、ある時は共感的な感性で生産性・功利性のシステム(資本主義社会)を迎え撃つカウンターの存在であった。またある時は、〈他者〉や、それを包含する〈世界〉そのものと
の共存を模索する開拓者であった。

特にシリーズ最後に扱う『ハクメイとミコチ』(エンターブレイン)では、ハクメイとミコチの暮らす「旅人の国」ヒノチは、外国人どころか動物や虫さえ含めた超多種族国家であり、中でも「旅人の作った町」マキナタはその名の通り人的流動性を根底に持つ。〈異質なものと共存すること〉が二人にとっては〈暮らすこと〉なのである。

現代社会においても、ポストコロナやポスト資本主義を視野に入れた識者が、〈共存〉または〈共存主義〉を提唱する。たとえば森本あんりは、アメリカという多民族・多宗教・多思想(主義)国家において、開拓時代から独立までにピューリタンたちが経験した「不寛容から寛容」に至る精神的遍歴を繙き、相容れない他者との共存戦略について分析をした¹⁾。しかし前回も述べたように、〈共存〉は耳触りがよいが、驚くほど落とし穴が多い概念だ。歴史的にみても共存の前提となる〈平等〉を〈同一化〉と混同せずに進むことがいかに難しいかがわかる。なぜなら〈共存〉とは、「みんな同じ」となること(同一化)を最終目的とせず、「異物を抱えた残念で居心地の悪い緩衝地帯を、えて、継続的に持つ」ということだからだ。

共存の難しさについては、近年話題となっているいくつかの社会問題が証明しているだろう。たとえば現在、人種・ジェンダー・容貌など、社会的なあらゆる差別を撤廃

しようとする社会運動「ポリティカル・コレクトネス」(通称ポリコレ)が世界規模で展開されている。日本関連では、ハリウッド版映画「攻殻機動隊」(二〇一七年三月公開)の主人公である草薙素子役にアメリカ人のスカーレット・ヨハンソンさんの配役が決定した時、アメリカ人の方が激しく「ホワイトウォッシング」と抗議をし、当の日本人を驚かせた。また国内では、ファミリーマートのプライベートブランド「お母さん食堂」の呼称に対し高校生たちが反対運動を起こしたこともある。

平等を求め共存の道を探すポリコレの活動だが、一部が過熱化したことで、同一化の強要を警戒される事も多い⁽²⁾。

特に保守派層では、福田ますみ『ポリコレの正体』(二〇二一年十二月、方丈社)が典型的だが、社会制度を脅かすアメリカの思想として、「多様性尊重」の果ての「言葉狩り」だと短絡的に結びつけ批判する言説が後を絶たない⁽³⁾。しかし考えるべきは、多様性の尊重を否定するほど警戒されてしまう「共存と同一化の危うい関係」の方だろう。

したがって、ポストコロナの時代において提唱される「脱成長コミュニズム」や「ポスト資本主義」という共存社会もまた慎重に吟味した方がいい。日本でこの思想を牽引する斎藤幸平は、「全体としては幸福で、公正で、持続可能な社会に向けての『自己抑制』を自発的に行うべき」と

主張する⁽⁴⁾。しかし、法的規制ではなく、個人の倫理観に手を付けるという意味で、「自己抑制」「自発的」「行うべき」という言葉はいささか不穏であろう。外的な規範(法)であれば複数の眼による監視のもと制限がかけられるが、内的な倫理は歯止めを持たず、底抜けの同化を迫るおそれがある。

「なぜ同一化を望むのか。それは生産させやすいからである」という全体主義的なループに移行していく可能性をどうして考えられないのか。

二、重ならない〈女子たち〉

どのような形であれ、共存を思い描く時、慎重に同一化と距離を取らねばならない。本稿で扱ってきた、キャラクターとしての〈女子たち〉は、〈女子〉という同一体の重なりではない。精神的にも身体的にも共感しやすい同種の者でありながら、互いの差異を見出しては愛でる、豊かな「共存関係」の具現化として、作品のモチーフに選ばれているのである。

無論、これは現代において可能となったモチーフだ。本シリーズ第二回で扱った吉屋信子『花物語』(洛陽堂)が執筆された大正時代ではそこまでの調和はとれず、むしろ歪な形で展開していることは確かである。吉屋は少女た